
ヴァンパイアの恋

春日 華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァンパイアの恋

【Nコード】

N4610F

【作者名】

春日 華

【あらすじ】

吸血鬼のレイ・アラクス。彼には、好きな人はいなかった。ただ・
・あの人に会うまでは・・・。

プロローグ

オレは、吸血鬼。

だから、好きな女なんてできないと思っていた。

あの人に会うまでわ．．．。

あの方は、オレの特別になっていた。
彼女だから、何をしてでも許せる。

オレは．．．．。

あの方の事が好きだ。

あの方を．．．愛している．．．。

だから．．．あの方もオレを．．．。

オレだけを．．．見ていて欲しい．．．。

01 出来事

オレは、吸血鬼。

オレに惚れてくれる女はいない・・・。
オレも、好きになれる女がいらない。

オレの城は山の奥深くにある。
だから・・・人間共は誰もよってこない。
都合がいい・・・。

オレは、毎日魔法の鏡で人間の生活を見ている。
意外と退屈しない。

「ご主人様・・・お茶でございます」
使用人がお茶を持ってきた。

こいつの名前は、ラシャル。
オレの傍を離れようとしなない。

当たり前か・・・。
まだラシャルは11歳だからな・・・。

オレは、苦笑をした。

「ご主人様？」

「いや、なんでもない・・・ありがとう」

オレは、そう言ってお茶を取った。

「今日は・・・匂いが濃いな・・・」

「申し訳ありません！たきすぎまして・・・」
「別にいい」

オレがそう言うトラシエルが嬉しそうにオレに抱きついた。

「ご主人様！！スキー！！」

まだ子供だな・・・。

「レイ様！！表でこんな人間を見つけました」
ん？

こいつもオレの使用人だ。

名前は、ルカ。

一応こんな名前だが、男だ。

そんな事はほつといて・・・。

オレは、ルカが持ってきた人間に目をやった。

相手は、13歳位だろう・・・。
女だ。

「どうされます？ レイ様」

「こいつは、晩飯だ！ 牢屋に入れておけ！！」

オレは、ルカに命じた。

「はい、かしこまりました」

まさか、こんな女が・・・。

オレの運命を変えることなど・・・。

この時は考えもしなかった。

02 姉

オレは、彼女を閉じ込めた牢屋を見に行った。

「どうした？家に帰りたいか？」

オレは、ちよつと笑って聞いた。

「帰りたい・・・お家・・・帰りたい・・・」

「貴様はオレの食事だ」

オレは、そう言うのと牢屋を後にした。

「ルカ、あの女に食事を」

「はい、レイ様」

オレは、ルカにそう伝えたと、自分の部屋に戻った。

「ご主人様！！客人が来ています！！」

今度は、ラシャルが客人を連れてきた。

また、女だった。

おそらく、16歳位だろう・・・。

墨を流したような、綺麗な黒髪をしている。

不思議だ・・・。

この女とは、どこかで会った気がする。

「妹を帰してください!!」

突然言われたので、オレは、頭が?だらけになった。

妹?

この女・・・あの女の姉か・・・!!

なるほど・・・。
姉妹なのか・・・。

「悪いが返すわけには行かないな・・・」

「返して・・・ください・・・私がここに・・・残るから・・・」

なんだ・・・この展開・・・。

『美女と野獣』のシーンみたいだな・・・。

まあ・・・たしかに・・・オレは野獣のようなものだ・・・。
そして・・・この女は、どう見ても・・・美女だな・・・。

「貴様・・・名前は・・・?」

「アリス・・・私の名前は・・・アリス・ドット・・・」

「ルカ!牢屋に閉じ込めた女を連れて来い!」

「はい、レイ様」

ルカはすぐに女を連れてきた。

「サカシャ！！」

「お姉ちゃん！！」

「よかった無事で・・・」

オレは、抱き合っている姉妹を引き離した。

「ルカ、その女を家へつれて帰れ」

オレは、妹の方を返した。

「お姉ちゃんは？」

「後で・・・帰るからね・・・」

「じゃあ・・・暖かいスープを入れて置くね！！」

「ええ・・・」

オレは、さっさと妹の方を城から追い出した。

オレは、窓の外を見た。

妹は、走って森から出て行った。

オレは、姉、アリスの方を見た。

泣いている・・・。

自分で決めたのだから・・・。

泣く事は・・・ないだろう・・・。

オレは、そう思ったけど口に出せなかった。

03同居

アリスという女は、ずっと窓の外を見ている。

妹と引き離してから・・・。

「おい、ごはんは何を食べる？」

「パン・・・」

アリスはオレの顔を見ずに答えた。

この・・・女！！

オレの顔を見ずに答えるなど！！

「他に何か欲しいものはないか？」

「別に・・・なに・・・」

ピシ。

本当にムカツクな・・・。

「用が済んだら出て行って頂戴」

「この・・・クソ女ーーーー！！！！！！！！」
オレは、大声で叫んだ。

アリスはビクリしていた。

「貴様！オレの顔を見ないで答えるなど・・・何様のつもりだ！！！」

オレは、アリスの胸倉を掴んだ。

「!？」

アリスは目を大きく開けていた。

「オレを本気で怒らしたいのか？」

「ちが・・・ちがう・・・」

アリスの目はだんだん涙目になってきた。

「私は・・・そんな意味で言ったんじゃない・・・」

「でわ・・・何故？何故オレを怒らす言葉を言ったのだ？」

「一人にして欲しい・・・」

「何故だ？」

「・・・・・・・・妹に会いたい・・・・・・・・悲しい・・・・・・・・」

アリスの声は、だんだん聞こえなくなってきた。

「貴様が残ると言ったのだろう・・・・・・・・」

「言った・・・・・・・・言っただけど・・・・・・・・妹が元気に帰ったか心配なの・・・・・・・・」

「ルカ、あの女はどうした？」

「元気に帰られましたよ？レイ様」

「だとさ」

オレがそう言ってアリスを見た。

アリスは少し笑った。

ホッとしたように・・・・・・・・。

「よかった・・・・・・・・よかった・・・・・・・・ありがと・・・・・・・・う・・・・・・・・」

アリスは、泣き出した。

オレは、捕まえていた彼女を地面に降ろした。

「ありがとう・・・・・・・・」

アリスは何度も言った。

そして・・・最期にこう言った。

「これから・・・よろしくお願いします・・・おやすみなさい」

オレは、目を大きく開けた。

「ご主人様？どーしたの？」

「なんでもない・・・ラシヤル」

「そう？」

オレは、静かに部屋を出て行った。

04 アリスの笑顔

オレが本気？で怒って以来、アリスはオレによく話しかけてきた。

まだ、笑顔ではないが・・・。

「レイさん・・・お茶・・・入れたんですが・・・」

「ああ・・・飲むわ・・・」

「ご主人様！アリスお姉ちゃんのこと好きー？」

「ラシャル？」

オレは、何故？という顔をした。

「だって・・・ご主人様・・・アリスお姉ちゃんと話すとき顔が笑ってるもん」

ラシャルは得意げに言った。

「！？」

オレはそんな顔をしているのか？
自分ではそんな自覚・・・ないが・・・。

「レイさん・・・どうぞ」

「ああ・・・ありがとう・・・」

・・・。

アリスの笑顔が見てみたいな・・・。

「ご主人様！今、何を考えたか分かったよ！」

オレが・・・考えたこと？

「アリスお姉ちゃんの笑顔が見たいんでしょう？」

何故分かる！？

「ご主人様顔にすぐ出るもん」

オレは、顔を隠した。

「キャハハハハ！！！」

ラシャルは笑った。

「レイさん、このクッキー焼いたんですが・・・」

「一個貰おう」

オレはそう言ってクッキーを一個取った。

パク。

！ 美味しい……。

「アリス……もう一個もらえるか？」

その瞬間。

アリスの顔が一瞬驚いて……笑った。

オレが見たかった笑顔だ……。

「エヘヘ……たくさん食べてね」

アリスの笑顔は見たものの全てを幸せな気分させる笑顔だった。

「美味しい？」

「ああ、美味しいぞ！」

「また……焼くね！」

「ああ……待ってるな……クッキー」

「うん！」

この笑顔にラシャルとルカも癒されていた。

「ご主人様！よかったね！アリスお姉ちゃんの笑顔が見れて・・・」

・・・。

怒りたいが・・・笑顔を見た後だしな・・・。

怒るのは・・・やめよう・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4610f/>

ヴァンパイアの恋

2010年12月12日02時45分発行